近代植物学界創成期の二巨匠

朝ドラ・らんまんのモデル：植物学の父『牧野富太郎』と福井県出身、明治・大正期の植物学者、教育者『平瀬作五郎』

我が国の近代植物学の草創は、一八七七（明治10）年代の東京帝国大学（現・東京大学）植物学教室を中心に展開されました。当時は、まだ先例のない研究で学生も少なく、情報も人材も不足する時代でした。そのような状況のなか、植物研究家の牧野富太郎と、画工としての腕を買われた平瀬作五郎のノンキャリア研究者二人を植物学教室が受け入れ、一八九三（明治26）年二人は同時に助手に任命されました。

福井出身・植物学者　平瀬作五郎

平瀬作五郎

平瀬作五郎は、福井市出身（一八五六・安政３年～一九二五・大正14年）の植物学者、教育者。福井藩中学校で学んだ後、岐阜県などの学校で勤務しました。

一八八八（明治21）年、帝国大学植物学教室に植物図などを描く画工として採用されました。93年からイチョウの研究を開始、96年に世界で初めてイチョウの精子の存在を顕微鏡で発見し、世界を驚かせました。一九一二（明治45）年、この功績により第二回帝国学士院（現日本学士院）の恩賜賞を受賞しました。帝大退職後は、滋賀県・京都府の学校に勤務しました。

帝国学士院恩賜賞　当時、学術面で最も権威ある賞

恩賜賞：帝国学士院（裏面に明治45年授、平瀬作五郎）

平瀬が受賞した「帝国学士院（現日本学士院）恩賜賞」は、学術面で特別な功績のあった研究者に贈られる、日本で最も権威ある賞です。その後、湯川秀樹や野口英世、寺田寅彦らが受賞しています。

高知出身・植物学の父　牧野富太郎

牧野富太郎

牧野富太郎は、一八六二（文久２）年高知生まれ。ほぼ独学で植物の知識を身につけ、一八八四（明治17）年に東京帝国大学理学部植物学教室へ出入りするようになります。以後、『日本植物志図篇』や『大日本植物志』などの刊行にたずさわり、一九四〇（昭和15）年に刊行された『牧野日本植物図鑑』は、現在まで改訂を重ね、植物図鑑として広く親しまれています。

同じ時代に異なった生き方をした牧野と平瀬。小学校を中退した牧野は学歴より実力、自分の研究を妨げるものに毅然と立ち向かう性格。その一方平瀬は実直な人柄で、探究心が強く地道な努力を惜しまない性格の持ち主。このふたりが近代植物学の草創期に活躍しました。

世界を驚かせた大発見『イチョウの精子発見』牧野の平瀬恩賜賞授賞所感

平瀬作五郎の発見・人物について、牧野富太郎はこう解説しています。「こんな重大な世界的の発見をしたのだから、普通なら無論平瀬氏は易々と博士号ももらえる資格があるといってよいのであったが、世事魔多く底には底があって、不幸にもその栄冠をかちえなかったばかりでなく、たちまち策動者の犠牲となって江州は琵琶湖畔彦根町に建てられてある彦根中学校の教師として遠く左遷せられる憂目をみたのは、憐れというも愚かな話であった。けれども赫々たるその功績は没すべくもなく、公刊せられた『大学紀要』上におけるその論文は燦然としていつまでも光彩を放っている。宜べなる哉、後ち一九一二（明治45）年に帝国学士院から恩賜賞ならびに賞金を授与せられる栄光を担った」（牧野富太郎著『植物一日一題』より）

【関連まなびや参照】
第41号世界が驚愕、大偉業
第53号平瀬著明治昭和教科書
第54号牧野と発見・命名新種